

## 「一座建立「いちざこんりゅう」

館長 長谷部 芳彦

一座建立とは、一期一会とともに大切にされている茶の湯の世界で使われてきた言葉で、「亭主」と「客」の協力によって茶席が高い完成度に至る、というような意味です。茶席において、「客」をもてなすのは「亭主」です。「亭主」は「客」に居心地よく過ごしていただくことを望んでいます。しかし、「客」はただ「もてなされている」だけではありません。「客」もまた、自ら場づくりに参加することで、その場は、より「こちよい場」になるということです。この考え方は、茶の湯の世界のみ存在するものではなく、親と子、先生と教え子、上司と部下、他人と他人、あなたと私などなど、ありとあらゆる人と人との関係に当てはめることができるのではないのでしょうか。雨の中、狭い歩道で人とすれ違うとき、お互いがぶつからないように気を使い合い、体や傘を傾ける。このような小さなことも「一座建立」と捉えるなら、一座建立は社会のいたるところに存在することとなります。

ノ貫（へちかん）という、戦国時代後期から安土桃山時代にかけての伝説的な茶人がいました。とは言っても私は最近までその存在を知りませんでした。（なお「ノ（ヘツ、ヘチ）」は、カタカナの「ノ」ではなく、漢字です。）ノ貫は、山科の地に庵を構えて住み、数々の奇行をもって知られました。豊臣秀吉が主催して行われた北野大茶湯の野点において、ノ貫は直径一間半（約2.7メートル）の大きな朱塗りの大傘を立てて茶席を設け、人目を引きました。秀吉も大いに驚き喜んだといえます。当時、流行していた高額な茶器などは用いず、独自の茶道を追求していたようです。手取釜1つで雑炊も煮、茶の湯も沸かしたなど、清貧ぶりが伝えられています。その一方で、当時の有名茶人との交流もあり、特に千利休とは親交していたといえます。

ノ貫と千利休の間に起きたという、こんな話が残されています。ノ貫は、千利休を自庵へ招待した際、庵の前に落とし穴を掘っておき、利休を落とし、汚れてしまった体を入浴によってきれいにしてもらい、新しい着物を供し、それからお茶をたてた、というのです。当の千利休は、ノ貫が落とし穴を掘り自分を落とそうとしていることを事前に知っていたというのです。つまり、わざと落ちたのです。ノ貫の一風変わった「おもてなし」を受けたことによって、ノ貫と利休との間に一座建立が成立した話だと興味深く感じました。

思いが一方方向で終わってしまっても、いくら思いが強くても何も起きません。思いが相互方向で作用するときだけに、何かかが生まれるのだと感じます。

ご利用者様と我々職員との間に一座建立が生まれるとしたら、これほどうれしいことはありません。